

全学レベルでの「学生による授業評価」実施とその効果②

佐野 幸子

(福岡女学院大学人間関係学部)

【問題】

「学生による授業評価(以下、授業評価と略す。)」は、faculty development推進において、重要な役割を果たすのであろうか。福岡女学院大学では、2001年度後期以降、期毎に授業評価を実施している。授業評価によって授業改善が進むのであれば、全学レベルの評価平均値は上昇すると予測される。そこで、各評価時における全学平均値をみたところ3.7前後(5段階評定)で推移し、有意差は検出されなかった。このような結果となった理由としては、①授業評価方法自体に問題がある(評価得点が当初より高水準にあり上昇の余地があまりない。重なる評価実施により中心化傾向が生じた。)、②評価水準の維持こそが、授業改善の証拠である(授業評価に着手していなければ、現在の授業はより評価の低いものとなっていた。)、③授業評価の活用が充分なされていない(授業方法支援策が不十分である。結果をカリキュラムに反映させられていない。)などが考えられた。

ところで、2000年に1学部において授業評価を先行している。その折、教員に授業評価の効果を5段階評定にて尋ねたところ、「自分の授業の改善に役立つと思う」4.04(SD=1.02)、「自分の授業の改善に実際に役立った」3.64(SD=0.85)と高得点を示した。大学全体での評価結果に上昇は見られないが、教員自身は何らかの効果を得ている可能性がある。そこで、本研究では、授業評価の結果を教員個人レベルで分析し、効果つまり得点の上昇が見られるのかどうかを検証することとする。

【方法】

福岡女学院には、四年制大学としてA学部とB学部(いずれも文系、定員240名)が、短期大学として英語科(定員200名)が存在する。短期大学を短期大学部と称し、四年制の2学部と合わせ3学部構成と考え、全学的な自己点検・評価・FD委員会を設置している。この委員会によって、2001年度後期以降、全学レベルの授業評価(前・後期いずれも1回、中盤過ぎ)を実施されている。

授業評価票は、3種の項目によって構成される。第一種は選択項目である。これは、大学で共通に準備された30前後の項目群から、各教員が授業ごとに、授業特性や教授法改善目標に合わせて選ぶものである。第2種、第3種は全学で共通した項目であるが、前者は教員の授業法を、後者は受講生自身の授業態度を問うものである。評価対象授業は、10名程度以上出席することが予想される授業、かつ、学内教員については、全員3クラス程度、学外教員については任意(2004年度前期より強制)としている。

本研究では、2001年度後期より2004年度前期までの6回の授業評価すべてを実施している学内教員53名を対象に分析を行った。各教員の得点は、評価時ごとに、評価を実施した各授業への評価得点平均(但し、授業授業方法に対する項目(上記、第一種と二種)のみ使用)を使用し、評価実施授業平均を算出したものである。ところで、各教員が評価時に

Tab. 1 評価時ごとの教員得点およびその変化

	MEAN	(SD)	差	t値
2001年度後期	3.78	(0.45)		
2001年度前期	3.84	(0.48)	0.12	2.35 *
2002年度後期	3.89	(0.46)	0.00	-0.10
2002年度前期	3.89	(0.46)	-0.02	-0.56
2003年度後期	3.88	(0.50)	0.01	0.26
2003年度前期	3.87	(0.50)	-0.03	-0.61

* p<.05

Tab. 2 評価時ごとの教員変容得点および成績群別にみた差の検定結果

X回-(X-1)回	02前-01後		02後-02前		03前-02後		03後-03前		04前-03後	
	N	MEAN	N	MEAN	N	MEAN	N	MEAN	N	MEAN
(X-1)回										
成績低群	16	.31	19	.09	17	.08	19	.03	14	.28
成績中群	17	.06	15	-.02	18	-.05	15	.12	23	-.11
成績高群	19	.01	18	-.08	17	-.10	18	-.10	15	-.21
合計	52	.12	52	.00	52	-.02	52	.01	52	-.03
F-value		3.69 *		1.57		1.47		2.50		7.08 **
Tukey .05		低-高								低-高, 低-中

* p<.05 ** p<.01

において選択する授業は様々であり、また、その授業評価に使用する項目も異なる。よって、本研究における教員得点は、妥当性、信頼性に問題を抱えていることを考慮した上で解釈なされなければならないことを付記しておく。

【結果】

評価時を追った教員得点変化を表1に示した。変化が有意となったのは、初回から第2回にかけてのみである。

各評価時ごとに、教員得点平均値±(標準偏差/2)によって、教員を成績別3群に分けた。また、各教員得点について、第X回から(X-1)回の差の得点を算出し、評価変容得点を算出した。教員成績群別にみた評価変容得点をみると、成績低群が、2001年度後期から2002年度にかけて、および2003年度後期から2004年度にかけて、以上2時期において、有意に上昇していることが判る。

【考察】

授業評価成績が悪かった教員は、その次の評価において得点を上昇させる傾向にあることが判った。この結果は、授業評価が、評価の低い教員にとっては改善材料を与えたり、授業を考え直す機会を提案したりするという効果をもつことを示すと思われる。では、成績高群については、授業評価の効果は生じないのであろうか。高群の平均値は、4.24から4.54となっており、非常に高く、これ以上の上昇は望めないという尺度の問題から、改善効果が数値として表れないのかもしれない。または、績高群は、新たな授業方法の開発や教育効果の向上を目した試みを、評価得点の低下を覚悟の上、次期に挑戦しているのかもしれない。これらの考察は、後の研究を待たねばならないが、少なくとも本研究結果は、授業評価は、評価の低い教員の授業の改善、ひいては大学全体での授業の底上げに効果を発揮していることを示している。